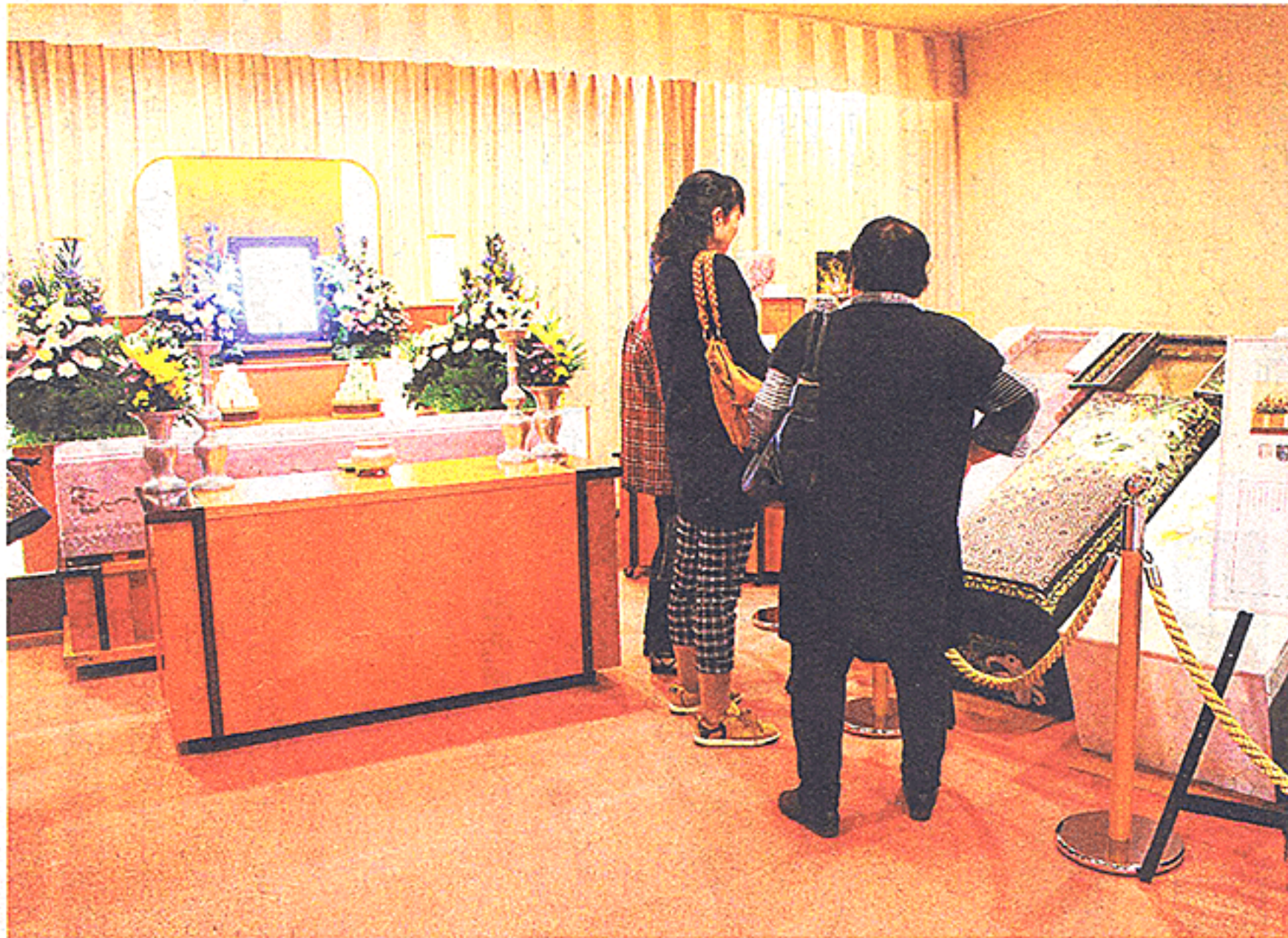


# 増える家族葬

やまなし  
くらし  
点描

4



写真と花を飾った祭壇にひつぎを置いただけのシンプルな会場。故人が好んだ弦楽器の音楽が流れる中、眠るように横たわる亡きがらに参列者がバラをささげる。家族や友人が思い思いに故人との最後の時間を過ごした。昭和町の主婦蒲田裕子さん(75)は6年前、夫(享年78)をがんで亡くした。

## 喪主の高齢化

しがらみや義理を好まなかった夫。夫婦とも東京出身で地元で親戚は多くない。仲間とともに、その人らしい最期の在り方を探る学習会を重ねていたこともあり、従来の形にとらわれない葬儀を模索。新聞などで告知せず、親族と親しい友人のみで執り行う「家族葬」を選択した。「時代の変化とともに葬儀もいろいろな形があつていい。主人らしい送り方ができ満足している」

家族葬が山梨県内でも増えている。葬祭業ブランドウワカツキ(若月洋介社長)が甲府市で運営する家族葬専用式場「光の部屋」の葬儀件数は、6年前のオープン時に比べ2.5倍に増加。「世間的な見えや体裁がない分、感情を出し、ゆつくり最後の別れができる」と若月社長。思い出話に盛り上がり、笑顔で記念撮影する場面もある。

拡大の背景には、高齢化や核家族などにも広く知らせず、家族や親しい友人のみで行う家族葬を検討する人が増えている。甲府市古上条町の家族葬専門式場「光の部屋」

# 送り方も個の時代

族化もある。平均寿命が80歳を超え、喪主を務める子らの年代も高齢化。喪主が引退していると職場関係も疎遠になり参列者が減る。「費用をかけたくない」という経済的な理由のほか、離れて暮らす子が喪主を務め「近所に迷惑をかけたくない」「手伝わってもらっても義理を返せない」として家族葬を選ぶケースもある。

人生の最期に向けた「終活」の関心も高まっている。「最期のプロデュースを自分なりにやってみよう」と話すのは、甲府市の自営業雨宮七蔵さん(70)。夫婦で話し合い、自分たちは家族葬で行うと決めている。仕事付き合

いで葬儀に参列する機会が多いが、自分のときは親しい身内がいれば幸せ。すでに遺影を撮り、生前戒名ももらった。出棺は「ロッキーマー」で明るく勇壮に送ってほしいと願う。「死は必ず訪れる。自分なりのエンディングを考えたいことで、生をいとおしく感じられる。今は毎日が楽しい」

## 慎重に検討を

かつては近隣住民が協力して自宅で行うのが当たり前だった葬儀。1990年代後半にセレモニーホールが普及

し、今は家族葬が拡大する。一方、「家族葬という温かい言葉の響きや経済的な理由だけで選ぶと、実態になじまないケースも。慎重に検討して」と指摘するのは、「法事の窓口」(甲府市)を運営するメモリアルハート社長で供養コンシェルジュの小宮山哲さん。家族葬にしたものの後日、香典を持って自宅を訪ねる人の対応に追われ「一般葬にすれば良かった」と後悔する声も聞く。「個の時代」と言われるが、山梨は地域や職場のつながりが深い。人は家族とだけ生きているのではない

甲府市の主婦(50)は昨年、母(享年78)を一般葬で送った。一人っ子で、父は既に他界。当初は「大々的にしても参列者が少ないと嫌だな」と家族葬も検討したが、当日は思いの外、多くの参列者が訪れた。「私たち家族に対する温かい思いに触れ、親の代から積み重ねてきた付き合いを改めて深める機会になった」と振り返る。ただ、自分のときはどうするか、答えは出ていない。「家族の生活スタイルに応じて変化する部分も出てくるかもしれない」

〈桑原久美子〉

「くらし点描」は随時掲載します

## 3割以上を占める

告別式のための「一日葬」は3割以上を占めた。葬祭業ブランドウワカツキ

鎌倉新書(東京)が運営する「葬儀総合サイト」の調査によると、家族葬の認知度は、9%に次いで多く、3割以上を占めた。宗教儀式のない直葬・火葬式は5.9%、ないかと予想している。